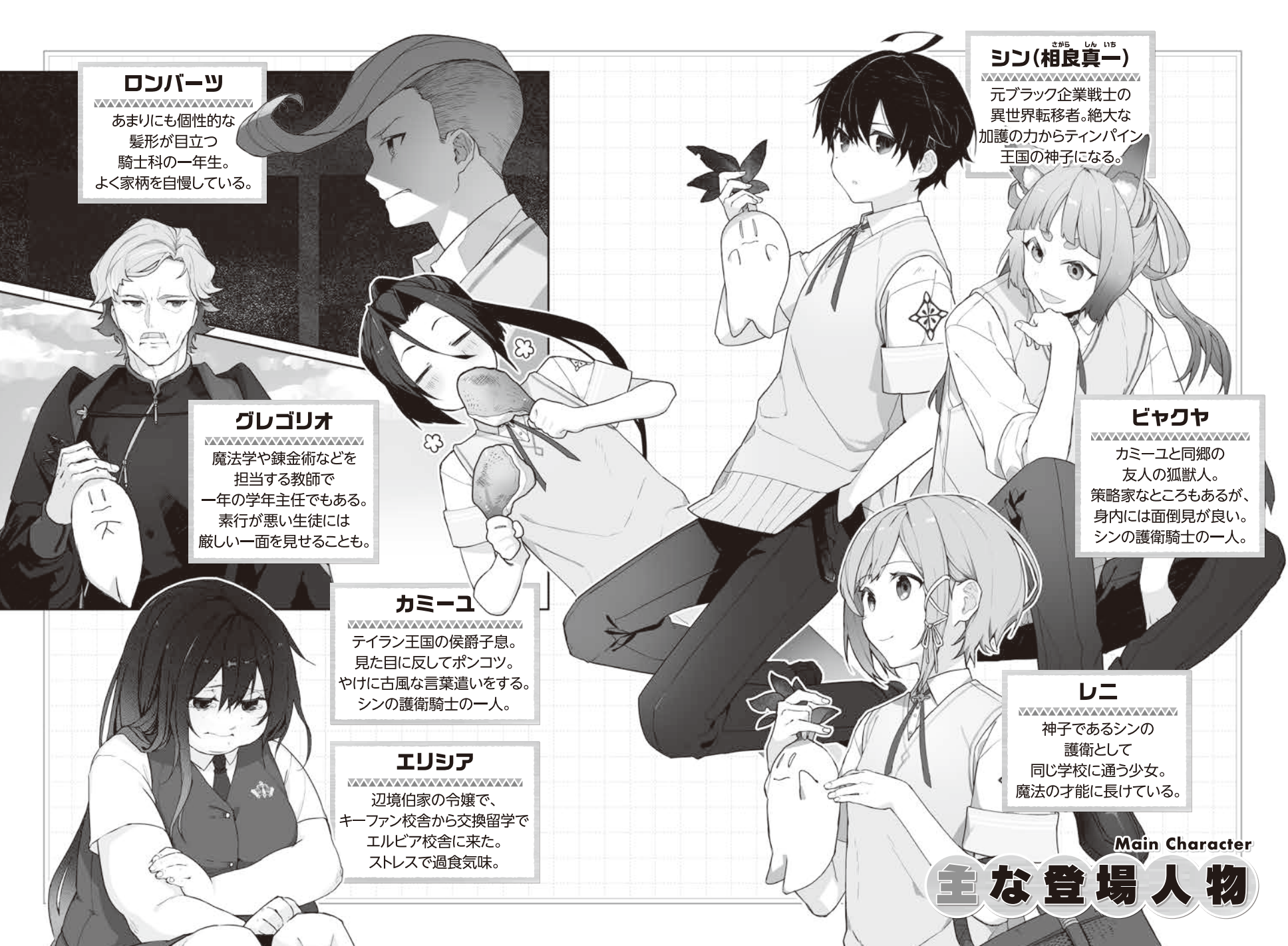
余りモノ異世界人の自由生活

勇者じゃないので勝手にやらせてもらいます

9

[著] 藤森フクロウ
Fuzimori Fukurou

[イラスト] 木々ゆうき


Main Character
主な登場人物
シン（相良真一）
元ブラック企業戦士の
異世界転移者。絶大な
加護の力からティンパイン
王国の神子になる。
ロンバーツ
あまりにも個性的な
髪形が目立つ
騎士科の一年生。
よく家柄を自慢している。
グレゴリオ
魔法学や錬金術などを
担当する教師で
一年の学年主任でもある。
素行が悪い生徒には
厳しい一面を見せることも。
カミーユ
テイラン王国の侯爵子息。
見た目に反してポンコツ。
やけに古風な言葉遣いをする。
シンの護衛騎士の一人。
エリシア
辺境伯家の令嬢で、
キーファン校舎から交換留学で
エルビア校舎に来た。
ストレスで過食気味。
ビャクヤ
カミーユと同郷の
友人の狐獣人。
策略家なところもあるが、
身内には面倒見が良い。
シンの護衛騎士の一人。
レニ
神子であるシンの
護衛として
同じ学校に通う少女。
魔法の才能に長けている。

プロローグ

ある日、一台のバスが事故を起こし、乗員が全て異世界に転移した。
そのうちの一人が、ブラック企業で使い倒されていた社畜戦士の相良真一――改めシンである。
シンたちを異世界に呼び出したのはテイラン王国。彼らが望んでいたのは、最強の武力を有する『勇者』の称号を持つ異世界人だった。
ところが、シンはテイラン王国が求める能力を持っていなかったため、早々に追い出されてしまう。
シンも異世界に送られる前に幼女主神フォルミアルカからスキルをもらっていたものの、ぱっと見がショボかったのだ。
ついでに、シンは謎の異世界転移特典で十歳ほどの子供になっていたのだが、そんな年端もいかない少年を、テイラン王国は容赦なく放逐した。
しかし、社畜の勘でその国にブラックな気配を察知していたシンは、これ幸いとばかりに国外に

逃げ出した。
その後、逃亡の果てにティンパイン王国に辿り着いたシンは、そこで気さくな狩人ハレッシュと知り合い、風光明媚な山村――タニキ村に移住する。
タニキ村で念願のスローライフを楽しむシン。
そんな中、彼は善良だがちょっと王族としては問題ありなティルレイン王子と知り合う。そして王子に振り回されて、あれよあれよと王都に行くことに。
さらにそこで、シンが多数の神々からの加護を受けていることが発覚し、一躍、国の重要人物として関心を集めてしまう。
シンはすぐさまティンパイン王国の公式神子として迎え入れられたのだった。
公式神子とはいうものの実質は兼業で、神子に割く時間はごく僅かである。
ティンパイン王国の辣腕宰相チェスター・フォン・ドーベルマン伯爵とミリア夫人の取り計らいもあって、シンはティンパイン国立学園王都エルビア校舎に入学。普段は学生兼狩人兼冒険者として生活していた。
そして迎えた夏休み。
シンの数少ない神子としてのお仕事の機会がやってきた。
国を挙げてのお祭りである天狼祭で儀式を執り行うのがお役目だ。

落ちぶれたテイラン王妃エマが暗躍したり、シンの護衛である聖騎士アンジェリカの家族が騒動を起こしたりとトラブルはあったものの、初めての公務は無事に終了。お勤めの後はシンもお祭りをしっかり楽しんだのだった。
こうして、夏休みが終わろうとしていた。
もうすぐ学園生活に戻る。新学期が始まるのだ。

第一章　彼女のけじめ

遠く祭りの喧騒が聞こえる。
すっかり陽が沈んだ後なのに、街の灯りは煌々としていた。
華やかな王宮の中にあって、ここは質素だった。
堅牢で近づきがたく、光源は少ない。仄暗く照らされる内部には、剥き出しの石壁や、頑丈そうな鉄格子が浮かんでいる。
武骨で豪奢さのかけらもないのは当然だ。ここは犯罪者を収容する場所なのだから。
そんな辛気臭い場所を、二十代前半の女騎士がキビキビした足取りで歩いている。
彼女はアンジェリカ・スコティッシュフォールド。聖騎士の証たる白い鎧を纏い、長い黒髪とアッシュモーヴの瞳が印象的な、凛とした美女だ。
シンたちが祭りを楽しんでいた頃、アンジェリカは牢屋に足を運んでいた。
そこには彼女の元婚約者であるグライド・ブルが収容されている。

アンジェリカは、異母妹のマリスに婚約者を奪われた。さらに、グライドとマリス、マリスを溺愛する父親のゲイブルによって、不当に家から追い出されていた。
もともとグライドはアンジェリカの婚約者としてスコティッシュフォールド子爵家に婿入り予定だったが、マリスに心変わりしたのだ。
そこでせめて穏便に済ませていればよかったものの、あえてアンジェリカを傷つけるようなやり方をとった。
しかし結局、マリスとは上手くいかなかった。周囲の目は冷たく、下手を打ったグライドはスコティッシュフォールド子爵家ともども顰蹙を買ってしまう。
そんな最中、元婚約者のアンジェリカが貴人の護衛になって帰ってきた。
ティンパイン公式神子の傍で堂々と立つ彼女と、社交界から干されたも同然のグライドたち。
完全に立場が逆転した。
逃した魚は大きかったと、グライドは否応なしに理解させられる。
自分も神子とお近づきになりたいとアンジェリカに頼んでもあっけなく断られ、グライドは惨めさで燻っていた。
そこに近づいてきた悪意ある存在――それがテイラン王妃、エマだ。
グライドはいいように口車に乗せられて、王城で暴れた。

エマの『魅了』の力で操られていたとはいえ、ティンパイン公式神子の近辺で暴れてしまったのは事実。グライドは捕縛され、容赦なく投獄された。

しかも今の彼には頼る相手がいない。

藁にも縋りたいところだが、実家であるブル家には切り捨てられているし、頼みのスコティッシュフォールド家のマリスとゲイブルは貴族籍を剥奪されており、今や藁以下だ。

そんな彼が最後に縋ったのが、手酷く裏切ったアンジェリカだった。

グライドは事情聴取にも非協力的で「アンジェリカに会わせないと喋らない」と、頑なに口を割らなかった。

その反抗的な態度で、酌量の余地すら失っているのに気づいていない。

そんな元婚約者の悪態をたまたま報告書で知ったアンジェリカは、呆れながらも彼女なりに思うところがあって、自らの意思で会いに来ていた。

牢屋にいるゲイブルは、薄汚いシャツによれよれのズボンを身につけており、不精髭の生えた顔は十歳以上老け込んで見える。

距離があっても異臭がすることから、何日も風呂に入っていないのがわかる。

数日ぶりだというのに、酷い落ちぶれようだ。

グライドは牢屋の隅でぼんやりとしていたが、足音の主がいつもの中年兵士ではなく、白い鎧の

美女――かつての婚約者だと気づくと、急いで彼女に駆け寄った。

鉄格子に齧りつく勢いで顔をつけ、声を張り上げてアンジェリカに呼びかける。

「アッ、アア、アンジェリカ！　そうだよな！　お前は俺を見捨てないよな⁉　助けてくれ！　お前は神子様の専属聖騎士なんだろう⁉　神子様からお偉いさんに取り計らってもらってくれよ！」

反省もなければ罪悪感もない。とにかくここを出たいという、浅ましくも脳味噌すっからかんの要望を口にするグライド。

予想通りの反応にアンジェリカは頭痛を覚え、そっと溜息をついた。

「そんなことしません。いつまで聴取に反抗的な態度をとっているのですか。このままだと、さらに状況が悪化しますよ」

事情聴取する兵士だって暇じゃないのだ。グライドのくだらない意地っ張りに付き合わされては憐れだ。

「お前は婚約者がこんな目に遭っても、助ける気はないのか⁉」

冷たくあしらわれるとは思っていなかったのだろう。グライドは怒りで顔を真っ赤にし、唾を飛ばしながら怒鳴る。力任せに鉄格子を揺らそうとするが、彼の腕力ではびくともしない。

アンジェリカは冷静だった。無駄な抵抗をする囚人を見ている。

不思議なほど心は平静で、凪いでいた。

以前はあれほど恐れていたのが嘘のようである。今はグライドのどんな言動にも心が揺れない。
ただツンとくる体臭と、大きな声が不愉快だ。
僅かな煩わしさと苛立ちはあるが、それだけ。
「元です、元。それはあなたがそうなるように仕向けたのですから、一番理解しているでしょう？　――私があなたと馴れ合い、ましてや協力するなど有り得ない。もう新しい婚約もしました。とっくに終わったんです、グライド。あなたとの縁は」
アンジェリカの冷ややかな口調と視線が、グライドを貫く。
婚約者として、幼馴染として、友として、十年以上歩んでいたのに、あっさり捨てたのはグライドの方。恋という情熱はなかったが、親愛くらいはあったはずなのに。
「さようなら、グライド・ブル」
先に別れを告げたのはグライド。
裏切ったのも、見捨てたのも、陥れたのも――全部彼だ。
グライドをお咎めなしになんてできない。
彼の罪は軽くないのだ。
減刑を嘆願すれば、アンジェリカだけの問題ではなくなり、同僚、そして上司であり護衛対象のシンにまで飛び火する可能性だってあった。

この性根の腐った男に「二度とその面を見せるな」と決別を告げるために、アンジェリカは来たのだ。
見苦しい期待を持って近くをうろつかれては迷惑だった。
しかしグライドはまだ希望を捨てられないのか、ぼろぼろと泣きながらアンジェリカを見た。
その姿を目にしても、アンジェリカの心が揺さぶられることはなかった。
（この男が泣いているのは、可哀想な自分のため。私への後悔や懺悔なんてない。我ながら、なんて男を見る目がなかったのか……）
きっかけは親が決めた婚約だった。アンジェリカとグライドの縁は、惰性で続いていただけ。
床に突っ伏して嗚咽を響かせるグライドを見下ろし、アンジェリカは来た道を戻っていく。
その間も、すすり泣くグライドの声はずっと聞こえていた。自己憐憫の涙は止まらず、この状況でもアンジェリカへの謝罪はない。
これでもう会うことはないだろう。
グライドとの最後の会話を終えたアンジェリカは、晴れやかな気持ちだった。
きっと、今なら父親や異母妹に会っても平気だ。何をあんなに恐れていたのか、もうわからなかった。
牢番にグライドの様子を聞かれたアンジェリカは、正直に答える。反省の色が見えなかったし、

協力的な態度はなかったと報告した。
外に出ると、ふと周囲が明るくなったので、アンジェリカは顔を上げる。
見ると、花火が打ち上げられていた。
祭りが開催されている間、毎晩決まった時刻に上がる花火だ。この花火を合図に、屋台は明日に備えて店じまいを始める。
（屋台や見世物も終わる頃だな……シン様たちは祭りを楽しめただろうか？）
シンたちも帰路に就く頃だろう。
シンは祭りを楽しむために、死んだ目をしながら儀式の練習を続け、重たい衣装も我慢していた。
アンジェリカも仕事は大体終わっているのでシンたちに同行することはできたが、気兼ねなく楽しんでもらいたくてあえて行かなかったのだ。
以前よりだいぶマシになったとはいえ、アンジェリカはやはり生真面目で融通が利かない。つい小言が出てしまいそうだと自覚がある。
特にシンはティンパイン王国に住んでいながらも、天狼祭は今回が初体験だ。純粋に祭りを楽しんでほしかった。
アンジェリカが歩いていると、前方から見覚えのある人物がやってきた。
背の高いホワイトブロンドの青年が彼女に声をかけて労う。

「お疲れ様です、アンジェリカ」
彼はルクス・フォン。サモエド伯爵子息で、今のアンジェリカを支えてくれる婚約者である。
少したれ目の優しげな顔立ちの印象通り、温和で真面目な性格だ。
「ええ、お疲れ様です」
打ち上がる花火と景色に気を取られて、だいぶ近づくまで気づかなかった。
アンジェリカが笑みを浮かべて歩み寄ると、ルクスも笑顔を返す。
「最後にグライドと会って、反省の色や協力の姿勢があるか確認しましたが、あれはダメですね。罪を認めず、釈放を求めるばかり。司法の沙汰を待ちましょう」
「やはりそうですか」
苦笑しながらもすっきりしたアンジェリカの横顔を見て、ルクスも何かを察したらしい。
ふと、アンジェリカが怪訝な表情を浮かべる。
「そういえば……奥の牢屋に、随分年老いた囚人がいましたが……あれは誰だったのでしょうか？多分女性だと思うのですが」
エマの『魅了』スキルが男性ばかりに使用されたこともあり、今回の騒ぎで捕縛されたのは男性が多かった。
エマが老婆を誘惑するとは考えられないし、戦力としても期待できそうにない骨と皮だけの老婆

だった。
「老婆ですか？　あの牢屋には今回の神子襲撃事件の関係者しかいないはずです。大半は男性で、女性はエマしかいないはずですよ。スキルを喪失した今、何もできないから一緒に投獄されているはずですが……」
ルクスはそう言いつつも、事件のメンバーリストを記憶から引っ張り出そうとする。
エマは美貌への執着が激しかった。本人も色々手を尽くしていたので、年齢より若く見えたはずだ。
ルクスは何度か目撃したことがあるが、美魔女や美熟女だったと言える。かなり派手好きでけばけばしかったとはいえ、少なくとも男女の判別が怪しくなるほどの年寄りではなかった。
ルクスとアンジェリカが、くしくも同時に首を傾げる。
そこでアンジェリカは思い出す。
「そういえば、エマは神罰を受けて、スキルを取り上げられたと聞きます。それが何か影響しているのでしょうか？」
「ない、とは言い切れませんね」
神々のすることは、人には理解しえない。
そして、神罰を与えられた人間の行く末など、ろくでもないものばかり。

テイラン王妃エマ――神々の怒りに触れるほどのことをした悪女の末路も同じだ。
二人は背筋が寒くなった。これ以上考えたら、せっかくの楽しい祭りの夜だというのに、心が萎えてしまいそうだ。
「そ、そうだ！　たまには飲みに行きましょう！　シン君たちも遊び疲れて戻ってきたら、すぐに寝るでしょう！　明日も祭りはありますし、催しもたくさんあります！　我々も英気を養いましょう！」
「そそそ、そうですね！　この時期限定のメニューも多いらしいですから！」
かなり強引な話題転換をして、アンジェリカとルクスは出かけることにした。
一刻も早く、できるだけエマのいる牢屋から離れたくなったのだ。
だが、その出先のバーで、お忍びデート中の宰相夫妻と会ってしまい、やはりあの老婆がエマだったと知ることになったのだった。

◆

天狼祭の準備が終わった後も、シンは学園の寮には戻らず、しばらく後見人であるドーベルマン伯爵邸に滞在していた。

神子としての大任は終えたが、相変わらずシンは忙しかった。
ずっと天狼祭にかかりきりだったので、愛馬のグラスゴーとピコはすっかりへそを曲げてしまった。そんな愛馬たちのご機嫌取りに、連日街の外に繰り出している。
早朝に出かけ、夕方になって泥だらけになって帰ってくる日々。
シンの護衛聖騎士であるアンジェリカ、レニ、カミーユ、ビャクヤの四人も交代で同行したものの、全力で走り出したグラスゴーにはついていけなかった。
爆走する一頭と一人はしょっちゅう魔物の群れに突っ込んでいくが、凄まじい爆音とともに馬たちがやっつけてしまう。
下手に近くにいると巻き添えになりそうな大技を繰り出すので、護衛役はシンを見失わない程度の距離を保つ形で落ち着いた。
ちなみに、やっつけた魔物は冒険者ギルドに出しているので、ちゃっかり収入になっている。
そんな日々が続き、シンはなんとか愛馬たちの不満を解消させた。
「やーっとグラスゴーたちも落ち着いてきたし、そろそろ学園の温室でも見に行こうかな」
シンは学園の一画にある古い温室で薬草や野菜を栽培して、生活の足し兼スローライフな趣味にしている。
収穫できる作物の有用性はなかなか侮れないので、新学期も再び温室活用をしたいと考えていた。

しかし夏季休暇中は帰省や天狼祭の準備などで温室の手入れができなかったため、雑草塗れになっているだろうから、草取りからやり直しだ。
新学期が始まるまであと十日ほどあるが、授業が始まれば必然的に自由時間は減る。
今のうちに、ある程度は整備しておきたいところだ。
「お手伝いします」
そう言って手を挙げたのは、大きな碧眼と金髪ショートボブの可憐な少女だ。彼女はレニ・ハチワレ。
彼女は近くにいた聖騎士の後輩二人をがっちり捕まえる。
学園内だから危険はないが、シンだけに肉体労働をさせるわけにはいかない。
「え？　某もでござるか⁉」
ぎょっとしたのはカミーユだ。紺色髪をポニーテールにした少年で、顔立ちはすっきりと端整だが、どことなく滲み出る残念な気配で、魅力がだいぶ削がれている。
そんなカミーユを、狐耳の獣人少年ビャクヤが叱る。
毛先が赤い金髪を結っており、マロ眉と赤い瞳がカミーユとは違う耽美な雰囲気を持っている。
しかし、中身がややオカン属性である。言い方は厳しいが、身内の面倒見は良い。
「お前……夏休み中、俺やシン君、レニちゃんに散々迷惑かけておいて、一人だけダラダラする気

なん？　休むんやったら、勉強するんやろうな？」
「さーあ！　楽しい畑仕事の時間でござるよー！」
巻き込まれたと最初は渋っていたカミーユだが、ビャクヤからの脅しを受けて、掌がクルックルに動いている。日頃から勉強を見てもらっているビャクヤには、強く出ることができないのだ。
シンとこの三人は上司と部下という間柄だが、ティンパイン国立学園の同級生でもある。
シンとレニは普通科の一年。カミーユとビャクヤは騎士科の一年である。
時間があるうちにやれることはやりたいと考え、シンはさっそく外出の準備をする。
学園に出かけることと、夕方までに戻ることをミリアに伝えると、彼女はシンたちに弁当を手配してくれた。
「ああ、そうだわ。これこれ。チェスターが忙しくて直接渡せないから、預かっていたの」
そう言って、ミリアはニコニコしながらシンに一通の封筒を渡した。
首を傾げながら封筒を開けると、そこには数枚の便箋が入っていた。
どうやら支払いの明細のようで、そこには見たことのない桁の数字が並んでおり、シンは目を丸くする。
「シン君から教えてもらった化粧水や美容液のレシピの使用料よ。とっても好評で、今後は工房を増やして専用農家とも契約する予定なのよ。これで本格的に生産規模が増やせるわ。効力はやっぱりシン君のお手製が一番だけれど……これぱっかりは秘密よね。見ての通り、金額が金額だから、金貨で支払ってもかなり重たくなるでしょう？　シン君は『マジックバッグ』を持っていたから大丈夫だと思うけれど。確認しながら渡すから、時間のある時に受け取ってね」
「は、はひ……」
あんまり長く見ていたら、金銭感覚が狂いそうだったので、シンはそっと便箋を畳んで封筒に入れなおす。
思い返すと、いつだったかレシピを譲った記憶がある。
（こんな金額どうすればいいんだ……お金って、あるところにはあるって、本当だな）
シンも狩人や冒険者としては稼いでいる方だが、文字通り桁が違う。
贅沢をしなければ、レシピの使用料だけで食べていけそうである。
この世にはその日の生活すらやっとで、屋根のない暮らしをしている人だって少なくない。なんとも贅沢な悩みである。
お金の使い道を考えていたシンは、タニキ村のことを思い出した。
「あ、あのミリア様。このお金をタニキ村の復興に回してもらえませんか？」
この夏、タニキ村と隣のバーチェ村は、人の血肉を好む狼の魔物――ブラッドウルフの巨大な群れに襲われた。

ヴァンパイアウルフという特殊な魔物がこの群れを統率し、村に襲い掛かったのだ。
特にバーチェ村は廃村となるほど甚大な被害を受けた。タニキ村まで逃げられた村民は助かったのだが、元の半分の人数になっている。
タニキ村には元騎士のハレッシュや、王都と直通でやり取りのできるルクス、加護持ちで魔力の多いシン、そして壊れ性能のチート魔馬が二頭いたので、なんとかなった。
ミリアもこの襲撃やその後の対応について知っていた。
「できるけれど、あそこには国からの補助金も出ているわよ？」
「はい。でも、村人の中には家や家族を失った元バーチェ村の人たちもいます。家畜や田畑を失い、これから冬に備えるのは大変でしょう。それに、今年は援助があっても、来年、再来年は難しいと思います」
タニキ村には人的損失はなかったけれど、家畜と田畑の被害はあった。
もともと酪農より狩りで生計を立てている村人が多いが、卵や乳製品の大半は家畜によって賄われている。
また、怪我はなくとも心に大きな傷を受け、精神的不調に見舞われた村人も多くいる。
「そうね……では教会を建てるのはどうかしら？　怪我などの後遺症があって働くのも難しい人や、孤児の受け入れもできるわ。ヴァンパイアウルフを追い払うのに、神々も手を貸してくださったと

聞くし、ちょうどいいと思うの。今までは小規模な祭壇だけでしょう？　正式な施設として建設する案はあったのよ」
この世界において、神々を祀る施設には、主に神殿と教会がある。
神殿は純粋に宗教色が強い施設だが、教会は孤児院や医療施設と併設するなど、民間に寄り添う慈善事業的な側面が大きい。
神殿は規律が厳しく階級も決まっており、組織として強いのだ。時には国とも渡り合うほど権力を有している。
一方、教会は神殿と国の両方から支援を受けつつ、質素に経営していることが多い。
重傷や難病の治療、解呪などは教会では難しいが、大金を支払ってもなんとかしてほしいなら神殿に行く。逆にちょっとした怪我や解毒なら教会でもやってくれる。それぞれにニーズがあるのだ。
タニキ村は超ド田舎の小規模集落なので、今のところそのどちらもなかった。
「シン君は神殿を敬遠しているでしょ？　だから神殿を建てるのは論外として、教会も建てていいものか迷っていたのよ。でも、シン君は神託を受けやすい神子のようだし、教会くらいあった方が神々にも面目が立つと思うわ」
「なるほど……」
「それに、先にティンパイン王家の方で教会を建ててこっちの人材を詰めておけば、神殿側が新し

く建てにくくなるもの。しっかり建てた方が、干渉を減らす口実にもなるわ」
「建てましょう」
うふふ、とちょっと含みのある笑みを浮かべるミリアに、シンは即答した。
シンの脳裏には、以前神殿で絡まれた紫色の変態神官ことアイザックの顔が浮かんでいた。
初対面でシンの体臭を吸ってきた、大変アブノーマルな性癖を疑いたくなる人物だった。
神殿の息がかかった施設ができて、万が一にもアレや同系統の人間が派遣されてきたら、地獄である。
（絶対嫌だ。悪夢すぎる……）
アイザックがあそこまで反応するのは稀な事例なのだが、あの吸引インパクトは未だに色褪せず、シンの中でトラウマとして残っていた。
あんなのがタニキ村の神官に赴任してきたら、シンは安心して村に帰れなくなる。
長閑なタニキ村に溶け込む気がしない。穏やかなスローライフが粉々だ。
「教会建設以外にも、定期収入の使い道があるといいのですけど」
シンの相談に、ミリアが首を傾げて思案する。
「うーん、それなら街道整備でもする？　本来なら国の仕事だから、シン君のお金は使わなくていいと思うけれど……タニキ村の規模に合わせた教会だと、すぐに足りてしまいそうなのよね」

（どれだけ収益上げているんだ、美容系レシピ！）
シンの美容品は貴族をはじめとした富裕層がメインターゲットだから、当然単価はお高めだ。
利益率が高いだろうとは思っていたが、シンの想像を超えていた。
「今の化粧水も大人気だし、シン君には今後もレシピについて交渉したいのよ。取引が増えれば、もっと利益も増えるでしょう？」
シンのお手製の美容品を愛用するミリアとしては、積極的な研究や開発をしてほしいのだろう。
それを聞いて、シンはぎょっとする。
「まだ増えるんですか⁉」
あの額面だけでも心臓に悪かったというのに、小市民の心を縊り殺す気だろうか……と、シンは引きつった笑みを浮かべる。
お金がないのはストレスだが、大量にありすぎても同じである。
あればあるほど良いと言う人間もいるとはいえ、金銭感覚が一度壊れたら一生戻らない可能性もある。
さすがに全額寄付などと、善行の塊みたいなことをするほど、シンは無欲ではない。
でも、一人で使い切る度胸もなかった。
煩悶するシンを楽しそうに眺め、ミリアは微笑ましさを覚えるのだった。

◆

シンはレニたちを伴って久々に学園に足を運んでいた。
夏休み中でもしっかり整備されていて、草が生い茂るなんてことはない。石畳に落ち葉やごみも落ちておらず、いつでも始業できそうだった。
少しだけ懐かしさを感じる門構え。シンは制服を着ていないので学生証を持っていき、守衛に通過の許可をもらう。
農具はマジックバッグに入れているから身軽だ。
日差しがきついので、麦わら帽子を被っていて正解である。
シンはちょっと古びた外観の温室を見つける。
遠目からも、中に緑色の何かが茂っているのがわかる。
「やっぱり雑草は出てきちゃうよな」
シンは眉を下げて、がっかりしたように呟く。
ガラス越しのぼやけた状態でもわかるくらいだから、相当繁茂しているだろう。予想していた通り、草取りからやり直しである。

「大丈夫ですよ。四人でやれば、新学期までには戻せますよ」
レニがフォローを入れると、シンも頷く。
それこそ、最初にここに手を入れた時よりはマシなはずだ。
一方、後ろにいたカミーユとビャクヤは、何か微妙そうな顔をしてひそひそ話している。
「どうしたんだよ？」
シンの質問に、騎士科の二人は顔を見合わせて口籠もる。
しかし、覚悟を決めたのか、口を開いた。
「いや、なんか温室の中で動いてへん？」
「某の気のせいかと思ったでござるが、ビャクヤも見たでござるか」
ビャクヤとカミーユの言葉に、シンは温室を改めて見るが、特に何かが動く様子は見えない。
古い温室は結露と汚れがあるので、中の様子ははっきりとは見えない。視界で判別できたのなら、それなりに大きな何かがいる可能性がある。
レニもシンの隣で目を凝らすが、わからなくて首を傾げる。
「野生動物でもいるのでしょうか？　ネズミや兎は穴を掘って下から侵入することがありますが」
タニキ村で農作物を作っていた時も、獣避けに作った囲いを掻い潜って畑に侵入する動物がいた。
鹿や猪のような大きさのある獣は、柵を跳び越えたり壊したりと力業でなんとかしようとするが、

小さい生き物はせっせと穴を掘って入ってくる。
野山に行けば食べ物が落ちているのに、果敢に野菜泥棒チャレンジを続けていた。
（エルビアは都会だから、あっちより食べ物は落ちてなさそうだしなー）
ゴミの中には残飯などもあるが、人の生活圏と近すぎる。
その点、夏休み中の温室なら人は滅多に来ないし、多少は食べ物が手に入る可能性がある。
夏休み前に収穫した大豆、トマトなどの夏野菜。それらのこぼれ種や、採り残しがお目当てなのかもしれない。
「うーん……人の気配を感じれば、動物は逃げると思う。草取りしつつ、温室に破損がないか確認だな」
そう言いながら、シンは温室の扉を開けて――スッと閉めた。
あまりにスムーズな動作だったので、後ろの三人は一瞬何か間違えたかと思ってしまった。
シンは真顔になった後、目頭を揉み解して唸る。
「なんか……あるはずのない？　いるはずのない？　いてほしくないものが、大量にあったような」
「なんでござるか、それは。煮え切らないでござるなぁ」
いつになく歯切れの悪いシンに、カミーユが首を傾げた。

立ち尽くすシンに代わって、カミーユがノブを掴んで扉を開け放ち――閉めた。
「……なんか白昼夢？　うーむ、白い悪夢が見えたような」
「そうか、お前も同じモノが見えたか」
やはりなのかとシンが諦観を込めて呟き、項垂れた。
「いやいやいや！　まだ同じものが見えたと決まったわけじゃないでござるぅぅぅ！」
現実を受け入れたくないカミーユが、ヒステリックというより、縋りつくように否定した。
頭をぶんぶん振り、紺色のポニーテールの先がビャクヤにびしばし当たっている。
まだ温室の中身を見ていないレニとビャクヤは、何が何だかわからない。
「二人ともどうしたんですか？　中に何があるんですか？」
異様な空気を察したレニが困惑気味に問うと、シンとカミーユは素早く目配せした。そして、無言で扉を指し示す。自分の目で確認してくれということだ。
「もう、なんなんですか？」
カミーユだけだったらレニは突っぱねていたけれど、シンまでそんな態度なので、仕方なく扉を開く――そして素早く閉めた。
「……そっちですか。そうきましたか……」
ジーザスとばかりに頭を抱える才女レニ。賢い彼女までもシンとカミーユと同じような反応だ。

シメというかオチを任されるように、最後に順番が回ってきたのはビャクヤだった。
「え、めっちゃ嫌なんやけど」
「そう拒否るなよ、ビャクヤ。一緒に地獄を見よう」
いつになく良い笑顔のシンが、くいっと指で温室の扉を指し示す。
逃げるのは許さないし、お前も見ろと、その笑顔から繰り出されるハイプレッシャー。
「さらに怖いんやけど」
ビャクヤは嫌々と恐々が半分半分といった様子で扉のノブに触れた。
後ろ姿だけでも、テンションが低いのがよくわかる。自慢の狐耳も尻尾もぺっちゃんこに萎れている。
三人が確認して、三人とも中身を黙秘するのだ。良い状況でないのは確かである。
覚悟したビャクヤは、そうっと息を殺して温室の扉をゆっくり開く。
温室独特のもわりとした湿度と温度が、隙間から漏れてくる。
土、植物、空気の臭いが濃密だ。
思ったより雑草は生い茂ってはいない――けれど、絶望的にいてほしくない〝ブツ〟が跳梁跋扈している。
畝も通路も関係なく、土に埋まってまったりしている聖護院系わがままボディ。

その間を遊び盛りの子供か砂浜で追いかけっこする恋人たちのように颯爽と駆け抜けていく白いナニカ。
そこには、蕪サイズから、人の背丈に匹敵するものまで、無数の白マンドレイクがいた。
その光景にビャクヤの目からスッと光が消えた。そして彼は、白マンドレイクに気づかれないように扉を閉める。
「アイツら、夏休み前に全部ぶち抜いたはずやーん！」
憐れな狐の絶叫が木霊する。
怒号にも聞こえるが、どこか悲哀に満ちている。
白マンドレイクは本来なら稀少な魔法植物だ。それに食べても美味しい高級食材でもある。
だが、四人は知っている。この温室で生まれるマンドレイクは普通のマンドレイクと違って、少しどころかぬるぬる動く。油断すると勝手に移住するし、増殖するし、倉庫に保管していた栄養剤まで盗んで使う、トンチキ極まりない厄介者なのだ。
つまり、下手な雑草より性質が悪いのが群生していた。
「あー、どうしたもんか。燃やすのは温室のダメージが心配だよな……かといって、風魔法もなー」
「土魔法も同様ですね。学園の温室ですので、多少の耐久性はありますけど、あの数を一網打尽にするには……」

シンとレニはかなりの魔力持ちなので、温室その他の損害を考えなければなんとかできる。そんな魔法使いの二人が、頭を抱える。
普通の植物なら地道に抜けばいいが、奴らに常識は通じない。油断すると移動するから、一気にやらねばいたちごっこになる。
シンたちの言葉を聞いて、カミーユは難色を示した。
「しかし、あの数を地道に抜くと？　かなりデカいのもいたので、こちらも怪我するかもしれないでござる」
温泉につかるように土の中でリラックスしていたデカブツは、一匹や二匹ではない。
シンたちより大きいサイズを人力で引っこ抜くとなると、かなりの労働だ。それに、白マンドレイクが大人しくしているとは限らないので、カミーユが言うように負傷するリスクがある。
ビャクヤが腕組みしながら呟く。
「せやけど、どないしてあんなん増えたんや？　夏休み前に一通りぶち抜いたはずなのに、マンドレイク祭り状態やん」
三人寄れば文殊の知恵という諺がある。四人集まればもっと良い案が出るかもしれないと、額を突き合わせているものの、なかなか妙案は出ない。
四人とも、まだ最初のインパクトを引きずって動揺していた。

「あ、そや。グラスゴーやピコちゃんも白マンドレイク好きやろ？　食べてもらうとか」
ビャクヤが思いついたアイデアを口にするが、シンは首を横に振る。
「いや、あの量は無理だろう。フードファイターでも無理だよ。それに、食べきる前にグラスゴーがキレたら、温室が吹き飛ぶ」
あんなのが足元をちょろちょろしていたら、鬱陶しいことこの上ない。
美味しいのは確かだし土産に多少持って帰るのは良いかとシンも一考するが、これは根本的な解決にならないのもわかっていた。
レニが小さく挙手したので、シンが頷いて発言を促す。
「あの、マンドレイクを抜いたとして、その後はどうしますか？　高級な魔法植物ですけれど、あの量をギルドやお店に卸したら、価値が暴落してしまうかも……」
レニが言う通り、下手に大量放出すれば市場価格に影響が出るだろうし、出所がシンたちだと割れたら厄介だ。
「僕のマジックバッグで小出しするよ。あの数を捨てるのももったいないし、可哀想だしね」
白マンドレイクは、土から離せばそれなりに大人しくなるから、収納できる。
シンたちにとってはニュータイプ雑草という認識になりつつあるが、白マンドレイクは一般的には激レア高級魔法植物だ。せめて有効に活用するべきだろう。

それに、粉砕して畑の肥やしにするのはちょっと怖い。何せあれは上級魔法薬の材料になるから、土壌にどんな影響が出るかわからないのだ。
四人がマンドレイク対策を考えていると、背後に背の曲がった人影が近づいてきた。
「使用人――ではなく学園の生徒か。何をして……あ」
振り返った四人の顔を――特にシンの顔を見て「やべっ」という表情になったのは、ロマンスグレーことグレゴリオ・プテラであった。彼はティンパイン国立学園の魔法学や錬金術などを担当している教師で、シンたちの学年主任でもある。
意外な人物の登場に、四人は目を丸くする。
「グレゴリオ先生？」
怪訝そうなシンの声に、グレゴリオは心なしかしょんぼりしている。
「そうか、もう少しいけると思ったんだがなぁ……」
「もしや、この温室の惨状は先生がやったでござるか？」
「惨状とは何事だ！　稀少な白マンドレイクの人工栽培の研究に大いに貢献したのだぞ！　この夏でどれだけ論文が進んだと思っている！」
カミーユの質問に逆ギレの勢いで言い返してくるグレゴリオ。
しかしこの発言は、温室をこんな状態にしたと自白したも同然である。

白けた周囲の視線をものともせず、グレゴリオは白マンドレイクの栽培法の大切さを力説する。
「深い山林や龍脈の通る場所にしかできないとされた白マンドレイクが、何故かこの温室では見事に成長するのだ！　土壌、水質、温度、湿度、魔力のあらゆる環境を調べ上げ、量産の目途が立てば、どれほど魔法薬や錬金術の研究が進むことか……！　ゆくゆくは多くの傷病に良薬が行き渡ることになるだろう」
今までにない力強さで、グレゴリオは熱弁する。
誰かのために行動する信念はとても立派だが、いざ温室で自由奔放に過ごす白マンドレイクたちを前にすると、苛立ちが増すシンたちだった。
「他の場所でも試したが、ここほど良い結果が得られた場所はない」
急激に勢いを失ったグレゴリオが、項垂れて言った。
彼以外の面子はこの温室だけ育つ理由に心当たりがある。
レニ、カミーユ、ビャクヤは何も言わなかったが、一人の人物に視線を向けてしまう。
たくさんの神々から激重感情を向けられて手厚く加護を受けている神子が、気まずそうにしていた。
きっとその辺の事情が、白マンドレイクの生育にも関係しているに違いない。
あるいは、ポーションによる液肥栽培もしていたので、その効力が土壌に残っていた可能性もある。
「しかし、ここ最近は少し増えすぎてしまってな。白マンドレイクを採取しようにも返り討ちにされる始末……助手たちも怪我をしてしまい、かといって私だけでは採取は難しい」
グレゴリオも繁殖しすぎているという自覚はあったようだ。
「手に負えんくなっとるやん」
呆れた目つきのビャクヤが鋭く突っ込むが、グレゴリオはめげない。
「学術の進歩には多くの知識人の努力と犠牲が付き物なのだ」
やりたくてやっているグレゴリオが自業自得で犠牲になるならともかく、それで苦労して整備した温室を侵略されては、シンとしては堪らない。
「でも、あのままじゃまずくないですか？」
冷静なシンの一言を受け、グレゴリオはちょっと居た堪れなくなった。
大人しくて優等生――それがシンの教員たちからの評価だ。そんな生徒からの冷たい眼差しは応える。
「夏休みが終わる前には戻そうと思ったのだ……」
グレゴリオは蚊の鳴くような声で呟いた。
彼も温室を返す気はあったのだ。元に戻そうと努力はしたが失敗し、その結果が現在の有様であ

る。今や温室はマンドレイク帝国と化していた。
「そ、そうだ！　マンドレイクの採取に協力したら、特別単位を出そう！　君たちは過去にマンドレイクの栽培をしていただろう？」
グレゴリオの提案に、シンは少し心が揺らいだ。
一つ単位が取れると、その分だけ時間に余裕が生まれる。
講義の内容によっては単位取得の難度が高く、中には一定の基礎単位を取得していないと受講すらできないものもある。
たとえば錬金術も、基礎や初級に相当する単位を取らなければ、応用の講義が受けられない。
シンの学びたい授業の中には、錬金術や魔法系統を複数単位取得することが受講条件になっているものもある。
そうした条件を満たす意味でも、グレゴリオの提案は魅力的だった。
シンの中で欲望の天秤が動く。皿が傾き、コーンと床を叩いた。
「手伝います」
しれっとシンがそう答えたものだから、三人も道連れ決定だ。
レニは「やっぱりか」という顔しかしなかったが、カミーユとビャクヤは露骨なくらいショックを受けている。

「そんなぁ、シン殿ぉ～！」
「先生に任せておけばええやん！」
カミーユとビャクヤが肩を揺するが、シンは頑として譲らない。
騎士科の二人には、魔法系の学科はほとんど関係ない。望むなら取れるが、二人はそこまで余裕のある学生生活を送っていない。学力も時間も結構ギリギリで、現状維持が精一杯なのだ。
正直に言えば、白マンドレイク掃除をやりたくなかった。二人とも奴らにはろくな思い出がない。
そんな二人の思いは届かず、シンはばっさり彼らの希望を切り捨てた。
「いや、だってマンドレイクをさっさと処分しないと、素材の育成や小遣い稼ぎができないし」
この温室は趣味の家庭菜園的な意味だけでなく、ポーションや美容品の材料を育てるためのものでもあるから、早めに片付けてしまいたかった。
シンには頼めば空き地どころか農場を用意してくれそうな後見人がいるが、学生の領分内でできるだけやっていきたいと考えていた。
（そろそろミリア様への入浴剤とか、秋冬向けの素材を調達しなきゃだし）
ミリアはシンお手製の美容品の大ファンだ。
宰相夫人であり、ティンパイン王国の社交界でも強い発言権を持つ美魔女である。その美貌を保つための研鑽は怠らない。

彼女はシンが過ごしやすいように色々配慮してくれているので、シンとしてもぜひとも良好な関係を続けたかった。
（うん、やっぱり温室は必要だよな）
薬草や香草は外でも調達できるが、量や質にムラが出る。安定供給にはポーションを肥料に使った栽培が一番だ。温室ならば露地栽培と違って人目につきにくく、たくさんの素材を持っていても不審がられないので、種や苗を入手できれば量産できる。
「でも……」
「このままマンドレイクを放置したら、次の大豆を植えるところがなくなるぞ」
いまだに渋っていたビャクヤだったが、シンの言葉を聞いた途端、落雷を受けたように硬直した。耳と尻尾が一気にぴーんとなって、毛並みがぼわっと膨らむ。
「さーて、サクサクブチ抜かんとなー」
お揚げの奴隷ビャクヤは、大豆をちらつかせるとあっさり意見を翻した。
カミーユは仲間の裏切りにショックを受けたものの、この状況で粘っても不利と判断して、がっくりと項垂れるしかなかった。
一人の教師と四人の生徒に対し、温室にいる白マンドレイクは目算だけでも百オーバーである。最低でも、一人当たり二十匹は捕まえなければならない。

何も対策せず闇雲に突っ込んでも返り討ちにされるので、五人は作戦会議を始める。
三人寄れば文殊の知恵。五人集まれば、さらなる叡智が期待できるはず。
しかしそれは期待と希望を込めた予想であり、楽観以外の何ものでもなかった。
「小さいのはともかく、あの大きい白マンドレイクは危ないですよね。思い切り叩かれたら、こちらが吹っ飛んじゃいます」
「そうだな。私の助手たちもアレのビンタには何人もやられた」
レニの憂慮に、グレゴリオは頷いた。
彼には助手が数人いたが、書物とお友達なデスクワーク系が多かったのもあり、フィジカルは弱かった。
そのため、全員マンドレイクに負けたそうだ。
命の危険があるというレベルではないが、マンドレイクにトラウマを持った者や、ぎっくり腰でしばらく動けなくなった者など、負傷者が多い。
「いっそ飛び道具で仕留めるとか……飛び道具なら持っていますよ」
シンの愛用武器は対獣や魔物でも通用する魔弓グローブだ。
多数を占める小さいマンドレイクの狙いを定めるのは難しいが、大物だけに絞ればそこまで難しくない。

「ダメだ！　あの大物は大事な実験サンプルとして、必ず捕まえねばならない！」
「せやかて、先生？　実害出とるんやし、サクッとシン君に射てもろた方が安全やと思うんですけど」
クワッと眼光鋭く、なんなら眼球が飛び出そうなほど目を見開いて抗議するグレゴリオに、ビャクヤが冷静なツッコミを入れた。
過去に規格外にでかい白マンドレイクとやり合った経験者としては、近づきたくないのだ。
「せめて植物らしく静かにしていたのなら、捕まえるのも楽なのでござるが」
カミーユがしみじみと呟くが、残念ながら白マンドレイクは植物にあるまじき俊敏さと柔軟さでぬるぬる動く連中なのだ。
その時、カミーユがふと何かに気づいた表情になる。
「動くということは、麻痺や睡眠のような状態にもなるのでござるか？」
それは純粋な疑問だったのだろう。
その言葉に、皆は顔を見合わせた。
相手は植物だが、あそこまで動くなら、何かしらの状態異常が効く可能性はある。
「薬……いや、動物とは肉体構造が違う。あくまで植物だから、魔法の方が効果はあるだろう」
グレゴリオは自分の経験や知識をもとに色々想像する。魔法植物に状態異常系の魔法をかけた前

例はないが、悪い発想ではないと頷いた。
植物系の魔物に対してその手の魔法を使うことはあるので、魔法植物にも有効かもしれない。
体が動かない状態なら、白マンドレイクを安全に収穫できるだろう。
「動かなくさせる魔法……となると、麻痺や睡眠なら私も使える。これでもフィールドワークで戦うことがあるからな。この中で使える者はいるか？」
グレゴリオはダメ元といった様子で四人に尋ねた。
すると驚くことに、シンとレニが挙手をした。
シンはオウル伯爵家からお詫びでもらった魔導書で習得し、レニは聖騎士として少しでも実力をつけようと、片っ端から覚えていたからだ。
デバフ系の魔法は派手さがないため不人気で、ほとんどの生徒は習得しない。
だが、実践においてはかなり有用な手段だ。圧倒的格上や、人数で不利な集団戦にも使える。
「二人も使えるのか」
期待していなかった分、グレゴリオの声が弾む。
旧温室はそれなりの広さがある。グレゴリオ一人で満遍なく魔法をかけるとなると苦労すると思っていたが、これならなんとかなりそうだった。
中には効きが悪い個体もいるかもしれないので、取りこぼしに対応できる人数は多い方が良い。

グレゴリオが薬による作戦をとらなかったのは、マンドレイクを採りに行く時の危険も考えてのことだ。
自分自身が薬の影響を受けて温室の中で倒れてしまっては、とても危険である。白マンドレイクは凶暴な魔法植物ではないが、大きな個体に踏まれたら大怪我をする可能性もある。
「まずは温室を覆う補助の魔法陣を描こう。範囲を指定して魔力を循環させれば、魔力の消耗を抑えながら重複効果が期待できる」
グレゴリオが地面に簡易な図を描く。
温室を覆うサイズの魔法陣を作り、その中の対象に魔法をかけるのだと説明した。
レニは頷きながら聞いていたが、随分大掛かりになりそうだと不安を覚えた。
「まずは魔法陣の基盤となる円ですか。かなり広範囲になりますね」
基本、魔法陣は円形の中に術式を織り込みながら図案を描くことが多い。円形は安定しており、魔力の循環を良くする性質があるので、ムラなく術を展開できるのだ。
多角形の魔法陣も不可能ではないが、一部に力が偏りやすいので注意が必要だ。
温室の周囲には木や建物が多いので、地面に綺麗な円形を描くのも一苦労だ。
レニは早速、難問にぶち当たったように顔をしかめていた。
グレゴリオはレニがちゃんと学んでいることに教師として喜ばしさを感じつつも、首を横に振る。

「いいや？　紙とペンを使い、魔法陣を描く。それを拡大し、空から覆う」
「「「空から？」」」
生徒たちの目を丸くした表情が、予想以上の反応で面白かったのだろう。グレゴリオはにっこり笑った。
「地上に描くのが一般的だが、何せここは障害物が多い。円が歪になると術が綻びやすいからな」
「あ、あの空に浮かべるとなると消費魔力は……」
レニの疑問に、グレゴリオは丁寧に答えていく。
「それは増えるが、状態異常系は攻撃魔法に比べて魔力消費が少ない。浮かべる魔法陣も、大きさこそあるが、大気は生物でないし質量も大したことないから、意外と簡単なんだ」
そう言って、グレゴリオは白紙を一枚取り出し、さらさらと魔法陣を描いていく。
レニは頷きながら、熱心にその説明を聞いていた。
「魔法陣を描く途中に遮蔽物が多いと失敗しやすいのだ。魔力を通し、術式を起動する際の異物となる。意思のある生物、魔力を帯びた物は特に障害となりやすい」
これがなくても魔法の行使はできるが、魔法陣による補助があった方がずっと扱いやすい。
特に複数人で魔法を発動させる時は、魔法陣がガイドラインの役割を果たすので暴発しにくくなる。

さすが長年教師をしているだけあって、グレゴリオの魔法関係の知識は豊富だった。教えるのだって得意中の得意だ。

彼は説明する間にも、慣れた手つきでペンを動かして、さらさらと魔法陣を紙の上に描いていく。

教わる側のレニも、新しい知識に前のめり気味に聞いていた。

「では、早速実践してみようか」

四人の生徒たちが興味津々で覗き込んでくる中、グレゴリオは用紙に描き起こした魔法陣に魔力を通し、拡大させながら一気に浮かせた。

温室をすっぽり覆う巨大魔法陣が、あっという間に空中に完成した。

「麻痺、眠り、幻惑……と、まあ色々な魔法に対応するようになっている。シンとレニは使える魔法を流してみなさい。まずはシンから」

「はい！」

最初に指定されたシンは、魔法陣を見上げながら魔力を練り上げる。

「魔法陣に向かって魔法を放つんだ。真ん中あたりが一番良いが、ここからならよっぽど変な方向に飛ばさない限り大丈夫だろう」

「わかりました。では、僕は麻痺の状態異常魔法を使います」

シンが魔法を放つ。

立ち読みサンプル
はここまで

魔力の粒子がキラキラと銀粉のように輝きながら魔法陣に吸い込まれていく。

その時点で、温室からガタゴトと音が鳴っている。早速魔法の効果が現れたようだ。

「では、私は眠りの魔法を！」

レニも魔法を放つと、さらに温室から物音が響く。効果は抜群だ。

白マンドレイクたちが文字通りバタバタと倒れていく気配に、魔法を使えない騎士科の二人は顔を見合わせた。

「おっかなー……」

「デバフ使いが敵にいたら厄介でござるな」

ビャクヤの率直な感想に、カミーユがうんうんと頷く。

状態異常魔法は攻撃魔法とは違って爆音や破壊音も出ないので、距離があると周囲から気付かれにくい。

魔法をかける側ではなく、かけられる側になる可能性の方が高い二人は、改めてその有用性を思い知らされて身震いする。

油断していたら、一網打尽だ。

「これを見ると、状態異常耐性って大事でござるな」

「道具屋の耐性系の装飾品や装備が高い理由がわかるわ」